



TITLE:

Jude the Obscureにおける「汚れ」

AUTHOR(S):

服部, 美樹

CITATION:

服部, 美樹. Jude the Obscureにおける「汚れ」. 英文学評論 2012, 84: 55-67

ISSUE DATE:

2012-02

URL:

https://doi.org/10.14989/RevEL_84_55

RIGHT:

Jude the Obscure における「汚れ」

服 部 美 樹

序

Thomas Hardy の *Jude the Obscure* (1895) (以下 *Jude* と略す) は、どのようなジャンルにも分類しにくい玉虫色の作品である。例えば、19 世紀小説の多くに使い得る教養小説という枠を指標として読もうとすると、通常の教養小説とは大きく異なる展開に戸惑う。これは Franco Moretti が指摘するように、通常の教養小説（つまり主人公が何かを得る代わりに何かを喪失し、理想と現実が妥協したところに解決が見られるようなもの）の重要な要素である社会的流動性が、*Jude* のような肉体労働者には保証されていないことによる。では主人公から少し距離を置き、Peter Widdowson のように Bakhtin のカーニバルの世界観を持ってこの作品を読めば、確かに主人公やその高い理想は、Arabella によって「格下げ」され嘲笑されているように見え、この作品は悲劇というより satire の領域

* 本稿は、日本ハーディ協会第 54 回大会（2011 年 10 月 29 日、中央大学）での研究発表『『日蔭者ジュード』における「汚れ」』に、加筆したものである。

に近づいていく¹。このような批評が出た後では、ただ単に主人公に共感し同情する読み方は物足りなく感じられるが、だからと言って、ジュードが理想を追い求め失敗することに対して、何の迷いもなく嘲笑することも難しい。実際、ハーディの「悲劇的」小説という観点で参考書を編纂した R.P. Draper も、*Jude* に関して “a hybrid - a wild ‘Polonial’ novel, tragical - comical - historical - anti-pastoral - satirical, and even parodic” と書いているほどである²。

本稿は、このような曖昧さを生んでいる要因の一つとして、作品で描かれる「汚れ」（よごれ）というモチーフに注目するものである。以下で示すように、ハーディはこの作品を通して繰り返し「汚れ」を提示し、「汚れ」に対する複数の観点の可能性を示し、「汚れ」をどう認識するべきか、を暗に問い続けているように見える。「汚れ」の問題に関するこのような執着は作品を構成する一つの動機となっていると言っても過言ではなく、「汚れ」は作品全体の世界観を考える上でも無視できない重要なモチーフとして、*Jude* という作品の曖昧さと深みを支える興味深い要素なのである。

1. 「汚れ」に対する執着

Jude を「汚れ」という観点から分析する前に、まず見ておかねばならないのは、Edmund Gosse の *Jude* 評とそれに対するハーディの反応である。ゴスは 1895 年 11 月 8 日付の *St. James's Gazette* でこの作品の陰鬱さやうす汚れた雰囲気について次のように書いている。

It is a very gloomy, it is even a grimy, story that Mr. Hardy has at last presented to his

1 Moretti (2000) x, Widdowson (1996) 66-71. バフチン的な読み方としては、他に Wotton (1985)、類似した視点のものに Doheny (1998) などがある。

2 Draper (1991) 247.

admirers. . . . We do not presume to blame him for the tone he has chosen to adopt, nor for the sordid phases of failure through which he drags us. . . . but, of course, we are at liberty to say whether we enjoy them or no. Plainly, we do not enjoy them. . . . Mr. Hardy concentrates his observation on the sordid and painful side of life and nature.³

これに対し、ハーディはゴス宛ての手紙で次のように書いている。

The “grimy” features of the story go to show the contrast between the ideal life a man wished to lead, & the squalid real life he was fated to lead. The throwing of the pizzle, at the supreme moment of his young dream, is to sharply initiate this contrast. But I must have lamentably failed, as I feel I have, if this requires explanation & is not self evident. The idea was meant to run all through the novel.⁴

これらはよく参照される有名な資料であるが、ゴスが作品の “grimy” “sordid” といった雰囲気を不満気に取り上げたことに対し、ハーディが熱くなって反応している、そのような形を見てとることができる。作品の grimy な側面は全体のアイデアを具体化するためには不可欠のものであり、それは自明のことであるはずだ、と考えているハーディが、ゴスの理解のなさに困惑している、という状況である。このような手紙が書かれたこと自体、ハーディが grimy なものを作品内で意識的に提示していることの裏付けであり、「汚れ」というモチーフを軸に今一度作品を見直すことを強く促すのである。

2. 作品内に見られる「汚れ」

ではハーディの「汚れ」に対する執着は、実際どのような形で作品に表われているのだろうか。以下では「汚れ」のモチーフが表われる場面を順に追ってい

3 Millgate (1971) 325.

4 Hardy's letter to Edmund Gosse, dated Nov. 10, 1895. Purdy and Millgate (1980) 93.

くが、前述の手紙からも窺えるように、「汚れ」は理想と現実の相克を意識させるように効果的に配置されていることがわかる。特にハーディが手紙の中で、一連のイメージの出発点としていた“the throwing of the pizzle”の場面（ジュードが Christminster に進学するという自分の理想の人生を夢想しながら歩いているときに、近くの豚小屋の前で豚の内臓などを洗っていたアラベラが豚のペニスを投げつける場面）は効果的である。

‘... Yes, Christminster shall be my Alma Mater; and I’ll be her beloved son, in whom she shall be well pleased.’... On a sudden something smacked him sharply in the ear, and he became aware that a soft cold substance had been flung at him, and had fallen at his feet.

A glance told him what it was — a piece of flesh, the characteristic part of a barrow-pig, which the countrymen used for greasing their boots, as it was useless for any other purpose... Jude grew sarcastic, as he wiped his face... (32-3; pt. 1, ch. 6)⁵

ハーディの全作品の中で見た場合、この場面は男女の出会いの場面としてはロマンチックな要素を欠いた珍しいもので、精神的な世界（ジュード）と肉的な世界（豚、アラベラ）が対立するという構図を際立たせる狙いがあると考えられている⁶。そして、その意味では確かにバフチンの言う「格下げ」（“The essential principle of grotesque realism is degradation, that is, the lowering of all that is high, spiritual, ideal, abstract; it is a transfer to the material level, to the sphere of earth and body in their indissoluble unity”⁷）を象徴する場面ともとれる。しかし、引用の最後に“he wiped his face”とあるように、肉的世界からの干渉は「汚れ」という形で

5 以下、作品からの引用は、全て Oxford World Classics 版の *Jude the Obscure* から行ない、括弧内でページおよび部・章番号を示す。

6 Irwin (2009) 197.

7 Bakhtin (1984) 19-20.

認識されていることに注目しておく必要がある。ジュードが顔を拭うのは「汚された」という認識があるからに他ならないのである。

同じようにアラベラとの関わりで「汚れ」が描かれる重要な場面が他にもある。ひとつは、豚の屠殺の場面である。

... he kicked over the vessel in which the blood had been caught. ... the main part being splashed over the snow, and forming a dismal, sordid, ugly spectacle — to those who saw it as other than an ordinary obtaining of meat. (59; pt. 1, ch. 10)

The white snow, stained with the blood of his fellow-mortal, wore an illogical look to him as a lover of justice, not to say a Christian. ... (60; pt. 1, ch. 10)

ジュードは豚の血を溜めておいた桶をひっくり返してしまい、白い雪は豚の血で染まってしまう。ジュードにはこの血のしみが“a dismal, sordid, ugly spectacle”、“an illogical look”に見え、彼はその光景に強い拒絶反応を示している。しかしダッシュの後の部分の語り（“to those who saw it as other than an ordinary obtaining of meat”）では、これは普通に肉を得ることである、という観点も有り得ることが示されている。そしてこの観点は、現実的なアラベラの態度に代表される観点でもある。

もうひとつ重要な場面は、アラベラがラードを作りながら、ジュードの本を手で払いのける場面である。

‘Leave my books alone!’ he said. ‘You might have thrown them aside if you had liked, but as to soiling them like that, it is disgusting!’ In the operation of making lard Arabella’s hands had become smeared with the hot grease, and her fingers consequently left very perceptible imprints on the bookcovers. (63; pt. 1, ch. 11)

アラベラのラードまみれの手は、ジュードの大切な本にはっきりと指の跡を残す。ジュードの理想の象徴ともいえる本が現実の生活の象徴ともいえる豚の脂によって「汚される」場面であり、ジュードはこの「汚れ」に対しても強い拒

絶反応を示している。

この他にも、ふたりが結婚前に安酒場で休憩している場面があるが、そこでも次のようにテーブルについたビールのしみ、痰壺などが汚れた場の雰囲気を物語り、ジュードを滅入らせている。

They sat and looked round the room, and at the picture of Samson and Delilah which hung on the wall, and at the circular beer-stains on the table, and at the spittoons under-foot filled with sawdust. The whole aspect of the scene had that depressing effect on Jude which few places can produce. . . . (41; pt. 1, ch. 7)

このように、アラベラが登場しジュードが彼女と関わる中で「汚れ」というものが描かれるようになっていく。そしてジュードは「汚れ」に対して、一貫して憂鬱さや怒りといった拒絶感を抱いている。一方のアラベラは、ジュードの目前に「汚れ」をもたらすという機能を果たしており、ジュードのように「汚れ」に対する不快感や拒絶感を示すことはない。それどころか沈着に物事を処理する際のアラベラの態度は、理に適ったものに見え、これが良くも悪くもジュードのナイーブさを際立たせる結果になっている。

この後アラベラは一旦退場するが、その後のジュードも「汚れ」と無縁ではない。理想の女性 Sue との関係にも、「汚れ」は入り込むようになっていく。例えば、大切な話をするために、ジュードがスーとどこか建物の中に入ろうとして、結局、閉店したあとの市場に入ってしまう場面がある。

He would have preferred a more congenial spot, but, as usually happens, in place of a romantic field or solemn aisle for his tale, it was told while they walked up and down over a floor littered with rotten cabbage-leaves, and amid all the usual squalors of decayed vegetable matter and unsaleable refuse. (158; pt. 3, ch. 6)

重大な告白には、それに相応しい“romantic”か“solemn”な場所が望ましいが、実際には野菜くずや生ごみが散らかる場所しかない。期待と実際の大きな落差

に直面し、ジュードは失望している。しかし引用中の“usually”や“usual”という表現は、「汚れ」が極めて日常的なものであるという観点を示唆し、「汚れ」に対して過敏に反応することをむしろ抑制しようとしているようにも読める。

以上のように「汚れ」はジュードの生活に入り込み、それを見とがめるジュードは怒ったり意気消沈したりするが、「汚れ」に対してこのような認識をするのはジュードだけではない。彼の理想の女性であるスーもまた「汚れ」に対して敏感な人物として描かれていく。例えば、スーが Aldbrickham でアラベラの宿を訪ねる場面がある。

She [= Arabella] may have seemed handsome enough in profile under the lamps, but a frowsiness was apparent this morning. . . . (258; pt. 5, ch. 2)

Sue looked out at the rain, and at the dirty toilet-cover, and at the detached tail of Arabella's hair hanging on the looking-glass, just as it had done in Jude's time; and wished she had not come. (259; pt. 5, ch. 2)

前の晩、アラベラがジュードを訪ねてきた際、スーは激しい嫉妬に襲われた。しかしその勢いでジュードと一夜を共にした後は気を取り直し、同情心からアラベラのもとを訪ねていく。しかし依然としてスーはアラベラに対抗心を持ち、アラベラに関するすべてを批判的に眺める意地悪な視線を持っている。それは、彼女の視線が「汚れ」もしくは「不快なもの」を次々と捉えることから明らかである。引用の最初の部分では、まずアラベラの“frowsiness”を、さらに後半では「雨」や「汚れた」化粧台掛け、「外されているつけ毛」を捉えている。そしてこれらのものを見た後では、スーの当初の同情心もしほみ、来たことを後悔しているのである。

スーが「汚れ」に敏感であることは、ジュードと結婚手続きのために役所へ行く場面にも明らかである。

On the steps of the office there were the muddy footmarks of people who had entered,

and in the entry were damp umbrellas. . . . The room was a dreary place to two of their temperament, though to its usual frequenters it doubtless seemed ordinary enough. . . . the bare wood floor was, like the doorstep, stained by previous visitors. (273; pt. 5, ch. 4)

これは役所に着いたふたりが汚れた場所に意気消沈していく様子を描いている場面である。来訪者の足跡に関する“stained”という表現は、足跡を「汚れ」と見る主人公たちの認識を示したものである。しかし、“to its usual frequenters it doubtless seemed ordinary enough”という表現は、この場所の「汚れ」をとりたてて認識しない態度もあり得ることを示唆し、これが、汚れた場所に強い拒絶反応を示す主人公たちの気質を際立たせる効果をあげている。結局スーは、“... The place gives me the horrors: it seems so unnatural as the climax of our love! ...” (274; pt. 5, ch. 4) と結婚の手続きを嫌がり、ジュードも “... The place depressed me almost as much as it did you — it was ugly.” (274; pt. 5, ch. 4) と応じるのである。

このようにジュードやスーは「汚れ」を敏感に捉え、それを見とがめ拒絶し、あるいは意気消沈し、それによって時には重大な決意をも挫折させていく。「汚れ」は彼らの希望や期待を簡単にくじいてしまうのである。

さらに注目すべきは、「汚れ」が単に目に不快感を与えるだけでなく、メタファーとしても彼らの世界観を縛っていくことである。例えばジュードとスーの次の会話を見てみたい。

‘... our perfect union — our two-in-oneness — is now stained with blood!’
‘Shadowed by death — that’s all.’ (327; pt. 6, ch. 2)

これは子供たちが無理心中をした直後の会話である。最初がスーの発言で、自分たちの完璧な結びつきが血で汚されたと嘆いている。“stained with blood!”というスーの言葉は、豚を殺す場面でジュードが目にした光景と響き合う。し

かし今回の場面では「汚れ」つまり stain は物理的には存在していない。「汚れ」はメタファーとして、スーの経験認識を形作る要素となっているのである。一方、ジュードは“stained with blood!”というスーの言葉に対し、“Shadowed by death — that’s all.”と返し、「汚れ」のメタファーで経験認識することを避けている。これは、子供の心中という厳しい現実を「汚れ」やしみという形に置き換えているスーの認識と、それとは異なるジュードの認識が対照的に示されている箇所である。

その後も「しみ」のメタファーはスーの経験認識を支配する。それは、Phyllotsonのもとに帰ったスーが、子供を失ったことについて話す際の“... I am glad — almost glad I mean — that they are dead, Richard. It blots out all that life of mine!” (385; pt. 6, ch. 9) という言葉に明らかである。子どもたちの死が、ジュードと彼女の関係を“blot out”してくれる、従って喜ぶべきこと、という内容であるが、ここから、スーにとってジュードとの関係は、“blot out”しなければならない「汚れ」として認識されていることがわかる。

一方のジュードはどうであろうか。先に引用したスーとの会話では、「汚れ」のメタファーで経験認識することはなかった。しかし、作品の終盤、スーがフィロットソンと実質的に夫婦になったことを知った時のジュードは“*And Sue defiled!*” (392; pt. 6, ch. 11) と嘆く。“defiled”という言葉にはっきり表れているように、この時のジュードは「汚れ」のメタファーに縛られて経験認識していると言える。

3. 曖昧化する観点

このように作品を通して見てくると、ジュードやスーは「汚れ」を敏感に見とがめ、意気消沈したり強い拒絶反応を示したりする人物として描かれている。その一方で語りはそのような彼らの態度に同調するのではなく、時にはジュード達とは異なる態度や世界観を包含するような描写を行なっている。語りが示

すこのような暗示は実に控えめであるが、しかし、このいわば匿名のかすかな暗示は確かに感知できるものであり、ジュード達の価値観の正当性に異議を唱え続けるものになっている。そしてここに作品がカーニバル化する兆し、つまり、規範的なものを格下げしていこうとする動きが見え隠れすると言っても過言ではないかもしれない。

実際、このような曖昧さについて考えながら作品を見ていくと、一見何気ない場面が不思議な力を帯びることもある。それは作品の終盤、アラベラがジュードを泥酔させて再婚の手続きに出かけ、その間、前夜から飲み続けていた客と朝になって店に立ち寄った Tinker Taylor が、談笑しながらふたりの帰りを待っている場面である。

Their [i.e. Tinker Taylor and other guests'] eyes followed the movements of the little girl as she spread the breakfast cloth on the table they had been using, without wiping up the slops of the liquor. (371; pt. 6, ch. 7)

女中がテーブルにこぼれた酒の汚れを拭かないまま、朝食用のテーブルクロスを掛けようとしており、それをテイラー達が目で追っている、という場面である。“without wiping up the slops of the liquor” という表現は、女中がテーブルを拭かなかった、という事実を伝えるものだが、何故ここでこの事実をテイラー達に見させているのだろうか。しかもこの場面では、テイラー達が女中の動きを目で追っている、と書かれているのみで、彼らがこれを見とがめているのか、それとも容認しているのか、あるいは全く問題視していないのか、はわからない。もともとテイラーは素面で店にやってきて偶然宴会を目撃する視点人物に仕立てられている。しかし冷静なテイラーの視線がこの女中の動きをどう捉えているのかは不明で、“without wiping up the slops of the liquor” という観点を示しているのが彼なのかどうかともよくわからない。肉的世界を象徴するアラベラが仕組んだ酒宴、そこに集う人々の無遠慮な物言い、これだけでもカーニバ

ル的な設定と言えるが、その中に「汚れ」が配されている。そして「汚れ」を見とがめるジュードもスーもこの場にはもはや存在せず、拠り所とすべき観点は与えられていないのである。

ここで、女中がテーブルを拭かなかったという事実は、アラベラの店の女中が主人同様に careless であるということを示すものだ、と読むこともできる。しかしその場合の careless の意味は何であろうか。というのは、careless には「軽率で不注意な」の意味と、「こだわらない、気取らずありのままの」の意味があり、ハーディはこの作品の中で、両方の意味を意識し使い分けているのである⁸。ハーディが careless という語の両義性を知っている作家であるなら、この場面の女中の行動を careless さの指標と読み取ることにも注意しなければならないであろう。結局のところ、女中は「汚れ」に対して不注意で気がつかないのか、それとも「汚れ」など気にしないおおらかさを持つのか、どちらかに決めるのは大変難しい。その結果、ここでも「汚れ」は拭い去るべきものなのか否か、という論点が浮上し、しかも曖昧なまま放置されることになるのである。

結 論

以上概観したように、*Jude* では「汚れ」を提示する場面が繰り返され、「汚れ」をどのように認識するのかという問題を浮上させるような曖昧な処理が施されている。そして「汚れ」に対するこの執着と曖昧さは、作品全体の世界観の一端を構成するものになっている。

「汚れ」というモチーフが重要なのは、それが人々の経験認識に絡んで複雑な問題を象徴することにもなり得るからである。例えば「汚れ」は、単に泥や

8 careless はアラベラを形容する以外に、“The sensual hind who ate, drank, and lived carelessly with his wife. . .” (123; pt. 3, ch. 1) のように出現している。

埃などが付着している状態だけでなく、比喩として、心遣いや教養の欠如もしくは道徳の欠如（けがれ）を表すこともある。これは cleanliness を道徳的に好ましい状態（無垢、清純）と結びつける認識体系と対になっており、少なくとも英語文化の中では自然に受け入れられている認識である⁹。換言すれば、「汚れの不在」が肯定的・規範的な価値と結びつくとき、「汚れ」は否定的・反規範的な概念と結びつくのである。従って字義通りの意味でも比喩的な意味でも、「汚れ」は不快であり当然排除すべきである、というのが規範的な価値観の態度となる。「汚れ」を見とがめそれを不快なものと認識するジュードやスーは、その意味で規範的な価値観を持っている。同じく、この作品を“grimy”と評し暗にハーディを批判したゴスの批評にも、この規範的価値観が窺える。しかし、ハーディがそのゴスの批評に熱く反応しているという事実や、「汚れ」を指標に作品を分析した結果から見えてくるのは、「汚れ」を単純に否定的な経験認識と結びつけることに対する違和感である¹⁰。

ここで確認しておきたいのは、*Jude* において「汚れ」のモチーフは常に作中人物の現実の生活の描写とともに表われているということである。これは、現実の生活という領域と「汚れ」は不可分のもの、というハーディの認識を示唆するものであろう。仮にバフチンのカーニバルの概念を援用すれば、「汚れ」は公的な世界からは排除されるがしかし「カーニバル」の領域では重要な構成要素となり、規範を「格下げ」する機能を担いうる。バフチンは公的世界とカー

9 例えば squalid や stain などの語が比喩的にどのような意味になるかを *OED* などの辞書で調べるとよくわかる。また、George Lakoff の *Conceptual Metaphor Home Page* (1994) でも、“Morality Is Cleanliness” というメタファーの体系が紹介されている。(Retrieved 21 Sept. 2011 from <http://cogsci.berkeley.edu/lakoff/>)

10 ハーディは *The Mayor of Caterbridge* (1886) の 36 章で、最下層の人々の溜まり場である Mixen Lane という汚れた場所を描写しているが、その際、女たちの白いエプロンが「勤勉さ」や「きれい好き」を示唆することを皮肉に扱っている。cleanliness と徳を安直に結びつけるべきでないというこだわりが窺える場面である。

ニバル的世界の対立の中で、カーニバル的世界のエネルギーに魅了されていたようであるが、ハーディも同じように魅了されていたのか——それは疑問であろう。しかし少なくとも「汚れ」から目を離すことが出来ず、「汚れ」を伴う現実の生活（“the squalid real life”）のエネルギーを否定することが出来なかった。その意味では、アラベラの店で女中の動きを眺めるテイラー達の視線がこの作品を制御する世界観に最も近く、結果として *Jude* を玉虫色の作品に見せるのであろう。

References:

- Bakhtin, Mikhail. *Rabelais and His World*. Trans. Hélène Iswolsky. Bloomington: Indiana UP, 1984.
- Doherty, John R. “Characterization in Hardy’s *Jude the Obscure*: The Function of Arabella.” *Reading Hardy*. Ed. Charles P.C. Pettit. London: Macmillan, 1998. 57–82.
- Draper, R.P. “Hardy’s Comic Tragedy: *Jude the Obscure*.” *Critical Essays on Thomas Hardy: The Novels*. Ed. Dale Kramer. Boston, Mass.: G. K. Hall, 1990. Rpt. in *Hardy: The Tragic Novels*. Ed. R.P. Draper. London: Macmillan, 1991. 233–248.
- Hardy, Thomas. *The Mayor of Casterbridge*. Ed. Dale Kramer. Oxford: OUP, 2008.
- . *Jude the Obscure*. Ed. Patricia Ingham. Rev. ed. Oxford: OUP, 2002.
- Irwin, Michael. “Hardy and Romantic Love.” *A Companion to Thomas Hardy*. Ed. Keith Wilson. Oxford: Wiley-Blackwell, 2009. 194–209.
- Lakoff, George. *Conceptual Metaphor Home Page*. 1994. Retrieved 21 Sept. 2011.
<<http://cogsci.berkeley.edu/lakoff/>>.
- Millgate, Michael. *Thomas Hardy: His Career as a Novelist*. London: The Bodley Head, 1971.
- Moretti, Franco. *The Way of the World: The Bildungsroman in European Culture*. New edition. Trans. Albert Sbragia. London: Verso, 2000.
- Purdy, Richard Little and Michael Millgate, eds. *The Collected Letters of Thomas Hardy*. Vol. 2. Oxford: Clarendon Press, 1980.
- Widdowson, Peter. *Thomas Hardy*. Plymouth: Northcote House, 1996.
- Wotton, George. *Thomas Hardy: Towards a Materialist Criticism*. Goldenbridge: Gill and Macmillan, 1985.